

海浜台地生物環境研究センター 自己点検評価報告書

平成18年度

平成 18 年度自己点検評価書

海浜台地生物環境研究センター

1. 研究センターの目的・目標

佐賀大学海浜台地生物環境研究センターは、2003 年に設立された学内共同研究教育施設である。当センターの目的は沿岸台地と浅海域の生物環境の相互作用に関する総合的研究に基づいて、山—農地—河川—浅海システムにおける生物環境資源を保全するとともに、浅海域における海藻類や魚介類などの未開発生物資源からの医薬品や生物農薬などの有用活性物質の探索に関わる研究、ならびに台地における生態系を保全し、かつ安全な食糧の持続的生産技術および資源循環型社会の確立に関する研究を行なうことである。

2. 研究センターの概要

【施設】

センター敷地面積	4,800 平方メートル
研究棟延床面積	810 平方メートル
ガラス温室面積	140 平方メートル
実験圃場面積	900 平方メートル
現地圃場面積（唐津市神田）	5,429 平方メートル

【教員・スタッフ】

センター長	谷本 静史（兼任，農学部教授）
副センター長	有馬 進（兼任，農学部教授）
	鄭 紹輝（専任，准教授）

専任教員

教授	田中 明（環境情報学）
教授	小林 恒夫（環境社会学）
准教授	亀井 勇統（浅海域生物資源学）
准教授	鄭 紹輝（生産生態学）

客員研究員

寺田竜太（鹿児島大学水産学部准教授）
大門 弘幸（大阪府立大学教授）

非常勤研究員

椿 真一

研究支援推進員

中元 博明
非常勤職員
木下たかね

3. 領域別の自己点検評価

(1) 教育の領域

ア 教育目標・成果に関する事項

大学院教育において、大学院農学研究科に加わり、センターの研究目標を題材とした教育を目指す。平成 18 年度において、農学研究科の教員と連携し修士課程学生 6 名、博士課程学生 2 名の研究指導を行った。

【評価】、修士課程および博士課程の学生を積極的に受け入れ、センターの教育機関としての目標をおおむね達成している。

イ 教育内容・活動に関する事項

大学院教育について、農学研究科に所属する修士課程の学生、および鹿児島大学大学院連合農学研究科に所属する博士課程の学生には、下記の課題で研究指導を行った。

【博士学生】

Supaporn Pongchompu: A Study on the Role of Post-retirement Farmer as a Supporting Person on the Development of the Regional Agriculture(主査:小林恒夫)

Mallika Baddage Ranathilaka: Organizational Impact on Rural Agricultural Development in Sri Lanka: A Case Study on Cooperative Societies in Kurunegala District (副査:小林恒夫)

【修士学生】

植松紘一: バラのトゲ硬化に関する研究 (主査: 谷本静史)

上村静香: シチメンソウによって干拓地の除塩は可能か? (主査: 谷本静史)

樫本正哉: 塩生植物シチメンソウにおける耐塩性維持遺伝子群に関する研究 (主査: 谷本静史)

小栗康臣: ダイズ遺伝資源中に存在する高オレイン酸遺伝子に関する研究 (主査: 谷本静史)

早川啓亮: シチメンソウにおけるベタシアニンの生理機能に関する研究-特に抗酸化作用に着目して- (副査: 谷本静史)

吉門方子: カンショに含まれるポリフェノール類物質の品種間差異ならびに栽培条件による変化 (主査: 有馬進, 副査: 鄭紹輝)

【評価】 大学院生の教育指導内容はおおむね当センターの設置目的に沿っている。

ウ 入学、卒業等に関する事項

該当事項なし

エ 教育環境に関する事項

該当事項なし

オ 学生支援に関する事項

該当事項なし

カ その他教育に関する事項

センターとしては、学部教育のメンバーではないが、各教員は農学部および全学共通教育の講義を行っている。また、各教員において農学部の関係分野と緊密に連携し、4年次学生の卒論研究指導の委託も引き受けている。平成18年度において、9名の学部学生の卒業研究を指導した。研究課題は下記通りである。

坂本祥子：ヒマワリの向日性に関する研究（指導教員：谷本静史）

林田敏志：アサガオの長日処理子葉篩管液の花成阻害活性（指導教員：谷本静史）

林田智史：コムギの植物体再生に関する研究（指導教員：谷本静史）

峯本誉：カサブランカリリーの球根分化について（指導教員：谷本静史）

北島理恵子、砂耕栽培による小形サツマイモの栽培法（指導教員：田中明）

中西祐子、松葉炭の有効活用方法について ―水質浄化と土壌改良機能―（指導教員：田中明）

平野栄一、イチゴの高設栽培ベッドにおける効率的灌水方法（指導教員：田中明）

山下裕次郎、粉碎松葉を利用した屋上緑化に関する研究（指導教員：田中明）

吉田孟史：佐賀県上場台地における葉たばこ生産農家の現状と課題（指導教員：小林恒夫）

【評価】 学部教育にも積極的に関与し、センターの教育的効果を高めている。

(2) 研究の領域

ア 学術・研究活動に関する事項

当研究センターでは、沿岸台地と浅海域における生物環境資源の保全および有用資源の開発利用を基本理念に研究行っている。これまで、「上場地域における農業生産体系の確立に関する研究」（佐賀県委託）、および「海浜台地農林水産受託研究」（唐津市委託）をはじめ、他大学・公的研究機関、民間企業との共同研究や学術振興会科学研究費による研究プロジェクトを実施している。具体的な研究課題として、高品質の地域特産物の栽培技術および有用成分分析、浅海域生物（海藻）の機能性成分の探索とその応用実験、沿岸陸域における水・土・気象条件の特徴の解明、海岸林の保全技術に関する研究、および沿岸の陸域・海域両方の資源を共に有効利用している半農半漁経営体の実態とそれらの持続的利用システムの開発などが挙げられる。

(A) 研究事項

【生産生態学分野】

台地作物の機能性開発と生産技術の確立
持続型農業技術の開発
海浜地域の水産加工関連廃棄物の農業利用

【浅海域生物資源学分野】

海洋生物由来の有用活性物質の探索・応用
海藻資源の医薬品開発
海藻遺伝資源の保存と分子育種

【環境情報学分野】

沿岸陸海域の環境情報収集と活用
沿岸陸域と海域の相互作用解析
高品質作物栽培のための希薄海水灌漑

【環境社会学分野】

中間地域と平坦地域が連携する広域的・資源循環型・環境保全型農業モデルの開発
近海小島嶼研究—唐津市7島嶼を対象に—

(B) 主な研究成果

【生産生態学分野】サツマイモに含まれるポリフェノール含量と栽培環境との関係を明らかにしたことにより、海浜台地産作物の機能性評価に貢献した。また上場地域におけるマルチムギの導入によって、雑草が抑制され、キャベツの減農薬栽培を図っている。さらに、水産加工廃棄物の肥料効果を明らかにしており、新たな環境保全型農業技術を開発している。

【浅海域生物資源学分野】褐藻ホンダワラから神経細胞の分化誘導を促進するクロロフィル関連化合物、フィオフィチン_aを見だし、本物質の分化誘導のメカニズムについて分子生物学的に解明するとともに、他のクロロフィル関連化合物であるビタミンB12にも同様な活性があることを明らかにし、これらの知見を *Int. J. Devl. Neurosci.*, 25, 63-68, 2007 と、*Cytotechnology*, 52, 181-187, 2006 に論文を掲載している。

【環境情報学分野】(1) 佐賀県からの受託研究「上場地域畑作物の機能性成分向上対策技術の確立」を受け入れた。(2) 唐津市からの受託研究「上場台地及び沿岸農地における環境資源の有効利用」を受け入れた。その成果として、希薄海水灌漑による高糖度トマトの栽培に関する研究を継続し、実用的な栽培マニュアル作成を行っている。また、海岸林に堆積している松葉の有効利用に関する研究においては、松葉炭による水質浄化及び土壌改良効果についての実用的な知見が得られた。

【環境社会学分野】今日平坦水田農業が呻吟している中で中間地域に属する佐賀県東

松浦半島（上場台地）の畜産・園芸農業が発展し、佐賀県の農業展開モデルが転換したことを示し、そのメカニズム（①米消費の減少と畜産物と園芸作物の需要増加、②国営土地改良事業の重点の畜産・畑作地帯へのシフトを背景とした畜産・畑作地帯である東松浦半島＝上場台地農業の発展）を解明した。同時に、その影の部分としての畜産・園芸偏重型農業がもたらす環境負荷を緩和し高次元において資源循環型・環境保全型を目指す農業の方向性をモデル化（上場台地での畜産由来の堆肥と佐賀平坦の稲わらの資源循環的利用）した。

【評価】センターの専任教員が4名と少数であるが、研究内容は多岐にわたっている。それぞれの分野で海浜台地の地域性に即した研究成果を挙げている。

イ 研究環境に関する事項

a) スタッフの充実

* 客員研究員2名を配置している。

* 非常勤研究員，研究支援推進員各1名を配備している。

* 下記大学・公立研究機関・企業との共同研究を推進している。

九州大学，鹿児島大学，東邦大学，岡山理科大学，九州沖縄農業研究センター，佐賀県農業研究センター，佐賀県上場営農センター

b) 研究設備の整備

* 現有設備の運転，管理を徹底し，研究にフル活用している

* 学内他の部局からの共同利用を進めている

* 研究のニーズに応じ，また研究の質的向上を図るために，新設備の整備を図っている

c) 研究資金の獲得

* 佐賀県，唐津市からの委託研究経費を獲得している

* 日本学術振興会科学研究費補助金（萌芽研究）を獲得している

* 民間から研究資金を獲得している

* 日本学術振興会科学研究費補助金を含め，各種研究助成金の申請を積極的に行っている

【評価】ソフト的な面では，スタッフの充実や他研究機関との連携により，またハード的な面では，既存設備の活用や，委託研究資金，民間資金ならびに日本学術振興会科学研究費補助金を獲得などにより，研究支援体制を整えている。今後センター研究活動の活性化には，さらに研究体制の充実を図り，大型新規プロジェクトの獲得に努力する必要がある。

ウ その他研究に関する事項

海浜台地生物環境研究センターでは，雑誌 Coastal Bioenvironment を2回（Vol.

7, 8) 発行し、研究成果の外部への公表に努めている。また、各分野においては、各所属学会への研究成果発表、論文の掲載を通じて、研究成果を積極的に国内外に公表している。

【平成 18 年度の研究成果一覧】

(1) 著書

- 1) 椿真一：兼業農家にも農業就業・所得機会を保証する特定農業法人、磯田宏・高武孝充・村田武編『新たな基本計画と水田農業の展望』筑波書房、83-100、2006
- 2) 椿真一：法人化の岐路に立つ集落営農・不安定兼業地帯、磯田宏・高武孝充・村田武編『新たな基本計画と水田農業の展望』筑波書房、115-130、2006
- 3) 椿真一：西南暖地における水田農業と構造改革農政、谷口信和編著『日本農業年報』53、農林統計協会、189-203、2006

(2) 論文

- 1) 溝上藍・谷本静史：ジネンジョウのウイルスフリー苗の大量増殖。佐賀大学農学部彙報、No. 92、9-15、2006
- 2) イチゴの高設栽培における土壌水分動態解析：田中 明、藤本牧子、西村智恵、Coastal Bioenvironment Vol. 7 2006,
- 3) 原田千春、田中 明：養液土耕栽培における塩水灌漑がトマトの品質に及ぼす影響、Coastal Bioenvironment Vol. 8 2007
- 4) 小林恒夫：東松浦半島（上場台地）の葉タバコ栽培用堆肥原料の構成と流通、Coastal Bioenvironment Vol. 7、1-8、2006
- 5) 小林恒夫：「肥前杜氏」小史序説、Coastal Bioenvironment Vol. 8、1-20、2006
- 6) 小林恒夫：半農半漁経営再論、佐賀大学農学部彙報、92、95-109、2006
- 7) Supaporn Pongchompu and Tsuneo Kobayashi：An Estimate of Agricultural Population and Post-retirement Farmer by the Cohort Method、農業経済論集 57(1)、89-98、2006
- 8) 椿真一：家畜排泄物の堆肥利用促進に関する研究、Coastal Bioenvironment Vol.8、21-26、2006
- 9) 椿真一：WTO 下における唐津市の大規模稲作経営の展開と課題、Coastal Bioenvironment Vol.8、27-34、2006
- 10) 坂本やよい・亀井勇統：ヘマグルチニン阻害試験による日本沿岸海藻の抗インフルエンザウイルス活性のスクリーニング。Coastal Bioenvironment 7, 15-24, 2006.
- 11) 伊奈隆年・亀井勇統：神経突起伸長物質、Pheophytin a 類似化合物の化学構造と神経突起伸長活性の相関。Coastal Bioenvironment 8, 41-50, 2006.
- 12) Kitamura, E. & Y. Kamei: Molecular cloning of the gene encoding β -1,3(4)-glucanase A, that is essential enzyme for degradation of *Pythium porphyrae* cell walls from *Pseudomonas* sp. PE2. Appl. Microbiol. Biotechnol., 71, 630-637, 2006.
- 13) Aoki, Y. & Y. Kamei: Preparation of recombinant polysaccharides degrading enzymes from the marine bacterium, *Pseudomonas* sp. ND137 for the production of protoplast of

Porphyra yezoensis. Eur. J. Phycol, 41, 321-328, 2006.

- 14) Ina, A. & Y. Kamei: Vitamin B₁₂, a chlorophyll-related analog to pheophytin a from marine brown algae, promotes neurite outgrowth and stimulates differentiation in PC12 cells. Cytotechnology, 52, 181-187, 2006.
- 15) Ina, A., K. Hayashi, H. Nozaki & Y. Kamei: Pheophytin a, a low molecular weight compound found in the marine brown alga *Sargassum fulvellum*, promotes the differentiation of PC12 cells. Int. J. Devl. Neurosci., 25, 63-68, 2007.
- 16) 有馬進, 鈴木章弘, 保田謙太郎, 鄭紹輝, 2006. 蕨野棚田における石積みの植物 (夏季). 佐賀大学農学部彙報 91: 9-16.
- 17) 有馬進, 鄭紹輝, 鈴木章弘, 寺森香織, 山下正隆, 2006. サツマイモの塊根片付き苗の育苗と栽培に関する二, 三の知見. 日本作物学会九州支部会報 72: 35-36.
- 18) 鄭紹輝・田中利依・有馬進, 2006. ヘアリーベッチのアレロパシーによる雑草抑制効果. Coastal Bioenvironment 7: 9-14.
- 19) 鄭紹輝・中元博明・梅崎輝尚・柏木純一, 上場地域におけるヒヨコマメの栽培について. Coastal Bioenvironment 8: 35-40
- 20) Thuy Phan, Shao-Hui Zheng, Mari Iwaya-Inoue, Tadahiko Furuya and Masataka Fukuyama 2007. Effects of thermophile sewage sludge compost on early growth of tall fescue (*Festuca arundinacea* Schreb.) and nitrogen leaching losses. Grassland Science 53(1):55-60
- 21) 古畑昌巳・岩城雄飛・有馬進 2006. 湛水土中直播水稻の出芽・苗立ちと出芽速度および種子の代謝産物との関係. 日本作物学会紀事 75, 182-190.
- 22) 野間貴文・廣瀬大介・有馬進 2006. 水稻品種の根系発達におよぼすアンモニア態窒素と硝酸態窒素の影響. 佐賀大学農学部彙報 91, 1-8.
- 23) Hoque, A. S. Isshiki and S. Arima 2006. Genetic variation of SKDH, PGI, PGD, PGM and IDH Isozymes in water chestnut (*Trapa* sp.). Bangladesh J. Genet. biotechnol. 6, 51-53. 2006
- 24) 古畑昌巳・岩城雄飛・有馬進 2007. 出芽速度および嫌気条件下における鞘葉の伸長速度が湛水直播水稻の出芽・苗立ちに及ぼす影響. 日本作物学会紀事 76, 10-17.
- 25) 古畑昌巳・岩城雄飛・有馬進 2007. 湛水土中直播水稻の出芽・苗立ちと鞘葉の伸長速度および趣旨の糖含量との関係. 日本作物学会紀事 76, 100-107.

(3) 学会発表

- 1) 原田千春、田中 明：養液土耕栽培における塩水灌漑がトマトの品質に及ぼす影響. 農業土木学会全国大会、2006年4月
- 2) 田中 明、西村智恵、三坂 亨：松葉炭による水質浄化について. 日本海岸林学会、2006年10月
- 3) 田中 明 藤本牧子、西村 智恵：高設栽培ベッドの土壌水分動態と効率的灌水

方法. 農業土木学会九州支部講演会、2006年11月

- 4) 松本雅子・平野勝紹・亀井勇統 (2006): 耐病性ノリ種苗の生物工学的作出の検討・27 ノリ細胞壁分解酵素ポルフィラナーゼB並びに β -1, 4-キシラナーゼCの性状, 平成18年度日本水産学会大会
- 5) 平野勝紹・小石澤 隼・亀井勇統 (2006): 耐病性ノリ種苗の生物工学的作出の検討28 *Pythium porphyrae* 細胞壁分解酵素 β -1, 3-グルカナーゼの機能未知領域の解析の検討, 平成18年度日本水産学会大会
- 6) 小川剛史・亀井勇統 (2006): 海洋微生物由来のメラニン分解酵素のスクリーニング, 平成18年度日本水産学会大会
- 7) 伊奈隆年・林 謙一郎・亀井勇統 (2006): 日本沿岸海藻の有用生理活性物質の総合的検索・62 褐藻ホンダワラ由来の神経突起伸長物質MC28の構造解析と活性, 平成18年度日本水産学会大会
- 8) 伊奈隆年・亀井勇統 (2006): 日本沿岸海藻の有用生理活性物質の総合的検索・63 褐藻ホンダワラ由来の神経突起伸長物質MC28のPC12細胞内シグナル伝達, 平成18年度日本水産学会大会
- 9) 坂本やよい・寺田竜太・亀井勇統 (2006): 日本沿岸海藻の有用生理活性物質の総合的検索・64 ヘマグルチニン阻害試験による日本沿岸海藻の抗インフルエンザウイルス活性のスクリーニング, 平成18年度日本水産学会大会
- 10) 重松奈央・亀井勇統 (2006): 分離海洋細菌 *Pseudomonas* sp. MP-6 株由来の抗MRSA物質 MC34 の性状と活性, 平成18年度日本水産学会大会
- 11) 中元博明・鄭紹輝・有馬進 2006. キトサンの土壌混和处理がイネの生育収量に及ぼす影響. 日本作物学会九州支部第83回講演会, 2006. 8, 福岡
- 12) An Moy Ngech1, H. Nakamoto, S. Arima and S. Zheng 2007. Influences of Nitrogen Supply During Late Seed Filling on Leaf Nitrogen Accumulation and Leaf Senescence in Soybean. 日本作物学会第223回講演会, 2007. 3, 茨城大学
- 13) 中元博明・鄭紹輝 2007. 子実肥大期におけるダイズ葉中の窒素および可溶性タンパク質の動態解析. 日本作物学会第223回講演会, 2007. 3, 茨城大学
- 14) 中元博明・森田敏・中野恵子・北川寿・中野洋・鄭紹輝 2007. 新地下灌漑システム(FOEAS)による地下水位制御が北部九州における大豆の生育および収量に及ぼす影響. 日本作物学会第223回講演会, 2007. 3, 茨城大学
- 15) 谷川宏行・湯浅高志・鄭紹輝・井上真理 2007. ダイズの結莢率に及ぼす植物ホルモン関連遺伝子の解析. 日本作物学会第223回講演会, 2007. 3, 茨城大学
- 16) 古畑昌巳・岩城雄飛・有馬進 2006. 湛水土中直播水稻の出芽・苗立ちに鞘葉の伸長特性および種子の糖含量が及ぼす影響. 日本作物学会第222回後援会, 2007. 10, 香川大学

(4) 報告書、その他

- 1) 平成 18 年度佐賀県受託研究報告書「上場地域における農業生産体系の確立に関する研究」
- 2) 平成 18 年度唐津市受託研究「海浜台地農林水産受託研究報告書」

【評価】研究活動は活発に行われ、また地域研究センターの特色としての、研究成果の地域への還元にも力を入れている。

(3) 国際交流・社会貢献の領域

ア 大学、職員及び学生の国際交流に関する事項

研究の質的向上を目指し、各分野は常に世界の研究動向を把握するため、海外に動向調査や、海外研究者との交流を行っている。また、自身の研究成果を国際学会やシンポジウムに積極的に発表している。

【平成 18 年度の教員海外渡航】

亀井勇統：7th Tunisia-Japan Synposium on Science, Society, Technology,
Sossue, Tunisia- 4-6 December, 2006

鄭紹輝：東北アジア作物生産国際シンポジウム。平成 18 年 8 月 12～17 日、中国瀋陽。

有馬進：ヨーロッパ農学会議。平成 18 年 9 月 2 日～10 日。ポーランド、ワルシャワ。

【評価】国際交流について、海外調査、国際学会などを通じて活発に活動している。今後、センターと性格が相似する海外拠点を作り、持続的交流を目指す必要がある。

イ 教育における社会連携・貢献に関する事項

センターが立地する地域環境との調和を考慮し、環境をテーマに、地域を対象としたシンポジウム、環境研究会、虹の松原を保護する活動などを通じて、地域住民に教育活動を行っている。

【評価】地域に密着し、地域への教育効果を果たしている点は特に優れている。

ウ 研究における社会連携・貢献に関する事項

地域研究センターとしては、常に地域の問題点を取り上げ、その問題解決を目的として研究を取り込んでいる。具体的には、地元の佐賀県および唐津市より毎年委託研究を引き受けている。また、地域農業の振興を目的に、地域研究機関との間で、最新研究情報を交換するための研究集会を年 2 回開いている。

【平成 18 年度に行われた社会連携のための研究集会】

- 1) 学会活動：日本植物学会・日本動物学会・日本生態学会九州支部佐賀例会
日 時：2006年11月25日
場 所：佐賀大学菱の実会館

- 2) 研究セミナー：第4回まつら環境問題研究会
日 時：2006年12月20日
場 所：佐賀大学海浜台地生物環境研究センター
参加者：15名

- 3) 研究セミナー：第16回上場農業振興のための最新情報交換会
日 時：平成19年2月20日
場 所：海浜台地生物環境研究センター
参加者：20名

- 4) 研究セミナー：北部九州・山口・島根地域大学・試験場作物研究情報交流会
日 時：平成20年3月10日（土）13時～17時
場 所：佐賀大学海浜台地生物環境研究センター2F 会議室
参加者：29名
内 容：耐乾性作物ササゲの水分保持特性に関する研究 山内崇（九州大学農学部），他13課題

【評価】 積極的に研究交流会を開催し、研究成果の地域還元配慮が行われている。

エ 大学開放に関する事項

研究センターの趣旨、研究内容を市民に公開し、理解してもらうために、4月22、23日オープンキャンパスを行い、多くの市民との交流を図っている。

【評価】 おおむね目的が達成されている。

オ その他国際交流・社会貢献に関する事項

留学生、海外研修生、および海外からの来訪者を積極的に受け入れている。また、研究成果を地域に紹介し、普及を図るとともに、地域の問題点を聞き、その解決に向けての助言を行っている。さらに、虹の松原を含む、海岸林の保全に関する研究及びボランティア活動を通じて、保全の意義についての啓蒙活動を続けてきた。この活動が認められて、日本緑化センターによる海岸林整備保全手法に関する検討会に参加することとなった。

【評価】 地域研究センターとして、「地域に開かれた大学」というイメージを作り上げている点は優れている。今後研究センターの研究情報や活動内容をインターネットを通じて、常に地域に発信できるよう努力する必要がある。

(4) 組織運営の領域

ア 教育研究組織の編成・管理運営に関する事項

該当事項なし

イ 財務に関する事項

財源については、大学運営交付金以外に、積極的に各種研究資金に応募し、財源獲得に努力している。また、エネルギー資源の節約、刊行物購入の総点検などにより、固定経費と経常経費の削減目標を立てている。

【評価】 固定経費と経常経費の節約が図られ、おおむね予算範囲内の執行ができています。

ウ その他組織運営に関する事項

a) センターの重要な運営事項については、センター運営委員会、教員選考委員会、研究報告編集委員会などをもって運営している。そのほか、日常的な諸問題は、センター内専任教員による独自の会議で処理し、組織運営の円滑化を図っている。

b) センターの活動状況を整理・記録し、年度末に活動実績報告書を作成し公表している。

【評価】 センターの重要事項の運営や日常的な管理はおおむねスムーズに行われている。

(5) 施設の領域

ア 施設、設備等の整備状況に関する事項

当センターには、天然光・人工光グロスキャビネット、走査型電子顕微鏡、質量分析器、イオンクロマトグラフなどの設備を保有しており、中には高額設備備品もあり、研究が円滑に行われるためには、定期的にメンテナンスを行っている。また、一般設備については、建物を含む安全管理、清掃、排水などすべて基準に従って行っている。

【評価】 既存設備は順調に稼働しているようである。

イ 施設、設備等の利用状況に関する事項

当センター内の研究設備、各分野が研究目的に応じて分担管理している。また、当センターは学内共同利用施設の位置づけであり、センターの施設・設備は、学内はもとより、共同研究など連携のある他の機関からの利用もある。平成 18 年度で

は、佐賀大学農学部、九州大学および佐賀県上場営農センターなどの機関からの利用があった。

【評価】 既存設備をおおむね研究に活用しているが、学内共同利用施設としては、他の学部・研究施設にもっと利用されやすいよう改善する必要がある。

ウ その他施設、設備等に関する事項

該当項目なし